

舟八島を過ぐ  
(正岡子規)

寓里吹來破浪風 追思往事已成星  
青山一帶人不見 唯有淡濃烟霧籠

万里 吹き 来る 破浪の 風

往事を 追思 すれば 已に 空と 成る

青山 一帶 人 見えぬ

唯 淡濃 烟霧の 籠むる 有り

解説 瀬戸内海の舟旅で屋島付近を通過したとき海風を浴びながら源平合戦の往時を懐古して作ったもの。

語釈 ※万里||あたり一帶。※破浪風||浪は波を吹き飛ばすように強く吹き抜ける風。※往事||屋島における源平の合戦をさす。※空||今日では跡を留めるものもない。※青山||青々と茂る山脈。※一帶||ひと続き、あたり一面。※榊琴||煙と霧。もや。かすみ。※烟霧||霧が立ち籠めている。

通釈 いま、舟で行き過ぎようとするこのあたりには、波も吹きちぎらんばかりに風が強く吹きつけてくる。対岸はちようど屋島である。思えば、源平合戦の昔、この地では激しい戦いが繰り返されたのであるが、いまとなつては空しく、その跡を留めるものとしてない。屋島の一面青々とした山なみのあたり、人の姿も見えない。ただ濃く薄くもやが立ち蔑めているばかりである。